

イギリスにおける成人に対する補償学習機会の検討 —シティ・リット Return to Study を事例に—

柳田 雅明
(青山学院大学)

【要旨】

本論考は、正規の学習機会が十分に得られなかった成人向け補償学習機会について、イギリスにおける取り組みを検討するものである。その具体的事例は、ロンドンの成人教育機関として名高いシティ・リット(City Lit)の「勉学への復帰」(Return to Study)コースである。「勉学への復帰」は、1年制週1回(9月～翌年5月・30週)の昼間課程である。学習内容は、普通・一般教育科目と学習スキルである。在学生への配慮が大いになされ、少人数授業と個別指導により、討議形式や講師の問いかけによって支援・展開していく。時間管理・文献活用法・まとめ方などの基本的学習スキル、特に「ノートを取り方」を身に付けていくことには力を入れて取り組まれている。在学生が目指す到達度は、16歳時点での標準的な水準である。なお、その政策上の位置付けおよび日本における関連取り組み導入可能性については、今後の課題となる。

1. はじめに

本論考では、正規の学習機会を十分に得られなかった成人のための補償学習機会について、イギリスにおける取り組みを紹介・検討する。今回事例とするのは、ロンドンの成人教育専門機関として名高いシティ・リット(City Lit)で実施されている「勉学への復帰」(Return to Study)である。

シティ・リットでは、フレッシュ・ホライズンズ(Fresh Horizons)と称される大学等高等教育機関(以下、大学等とする)への入学などのための準備コース群(access courses)が設けられている¹⁾。「勉学への復帰」は、そのフレッシュ・ホライズンズの中での導入コース(Introductory courses)として位置付けられている。1年制課程と夏期講習があるものの、今回は参与観察ができた1年制課程を検討の中心とする。

先行研究では、フレッシュ・ホライズンズへの言及は、ピーター・ジャービスの著作²⁾に見られるように、もっぱらその大学進学準備教育に焦点があるといえよう。また筆者自身も、イギリスにおける成人向け高等教育入学準備課程(Access to HE programme)について、イングランドとスコットランドを比較しつつこれまで紹介・検討してきた³⁾。ただその際、高等教育段階での学習に付いていくことに準備教育が必要な人たちとともに、その準備学習機会ですぐにさらなる準備段階を必要としている人たちの存在にも着目してきた。具体的には、ロンドンのルイシャム・カレッジ(Lewisham College)の事例⁴⁾に触れ、またスコットランド・スターリング大学(University of Stirling)の主導による CAML (Community Access to Mainstream Learning, 主流学習へのコミュニティ入口)と VaLEx

(Valuing Learning from Experience, 経験からの学習評価)といった試行プロジェクトを筆者は紹介・検討している⁵⁾。

今回筆者は、2007年3月8日にシティ・リット「勉学への復帰」コースを午前・午後ともに授業を参与観察でき、その際コース責任者・担当教員そして在學生にも聴き取りを実施した。

2. コースの内容

「勉学への復帰」は、週1回10:00-15:00の1年制(9月～翌年5月・30週)の昼間コースである。なお、夏期講習は同一時間帯で5週、入学者には基礎的な識字のみ求めている。

「勉学への復帰」の開設趣旨と教育内容は、次の通りである。⁶⁾

はじめに

本コースは、学習スキル(study skills)と自信とを培いつつ、文学・歴史・社会学、数学、コンピュータ活用といった学びへととざないます。

コースの目的と対象者

本コースは、教育における再出発の機会を提供します。進学や労働市場に必要な力が身につく前提となるスキルや知識を、自信を培いつつ得るため、設けてあります。

コースの水準

本コースは、勉学に関心と意欲があっても、今まで教育機会が十分に得られなかった人たちのためにあります。ロンドン地域オープン・カレッジ・ネットワーク(Open College Network - London Region (OCNLR))での水準2もしくは水準1が、本コースで到達度単位認定できます。

教育の内容・テーマ・プロジェクト

普通教育科目でのスキルを学びます。自信、考え方、読解の仕方、文章の書き方、議論におけるスキルを培います。議論では考えを探求・発表します。また様々な種類の文章作りを練習します。このコースでは、時間管理、文献の使い方とまとめ方、そしてスペルや書式・文法などの基本的学習スキルを、学習グループのニーズに応じて、身に付けます。

文芸(Literature) :

様々な種類の文章づくりをしながら、さらにしっかりと理解ができる機会を提供します。

社会学 :

その導入コースとして、社会問題への関心を高め、我々が住む社会についてさらに理解を深めていくために実施します。

数学：

形式張らずフレンドリーに、教室全体、小グループそして個別教授で行います。授業の際に探求する題材は、「数学って何?」「毎日の生活での数学がどう表れるのか?」「計算機を使うのってずるいの?」とかです。もうできていることをもとに、新たなことをどう学ぶのかを検討します。なお、前もって知っておくべきことはありません。

コンピュータ：

文書作成とインターネット活用の基本を学びます。そのねらいは、コンピュータを楽しく気軽に使えるようにすることです。新しく習うことは、実際のやり方をそれぞれお見せしながら説明します。自信がついてくると、自分でどんどんと学んでいけます。コンピュータを使ってコース課題を、書いて編集して書式を整えることもやります。

歴史：

そのねらいは、過去そして現在を理解することを促しながら、歴史の勉強へとあなたを導くことです。

成功のための履歴書づくり (CVs for success)：

授業 1 日半分を使って、職探しなどキャリアを切り開いていくのに役立つ履歴書を作成できるようにします。

修了時期待できる到達度：

自信をさらに付けて学び、将来の勉学に取り組んでいくこと

読んだことからより多くのことを得ること

より明確かつ自信を持って自分自身を口頭でも書面上でも表現すること

なお、本コースは、「全国資格枠組み」(National Qualifications Framework)の水準 2

もしくは水準 1 の到達度を、ロンドン地域オープン・カレッジ・ネットワークが認定しています。

教育方法

少人数そして個別での学びを、討議を通じてまた講師が問いかけていくことで育みながら、積み上げていきます。すでに身に付けているスキルを検討した上で、手引きのある探求と練習を通じて、スキルをさらに高めていきます。個別の問題に関してあなたを手助けするために、別途のサポート授業や個別指導もあります。宿題は、毎回出ます。

ちなみに筆者の訳語では、「コースの目的と対象者」「修了時期待できる到達度」「教育方法」と日本における一般的な表現とはしているものの、原語では What is the course about? (このコースは何に関するものですか?)、What can I expect to achieve? (私は何を達成することを期待できますか)、How will I be taught? (私はどうやって教えてもらえるのですか) となっている。すなわち、言葉は抽象的で堅い言葉でなく、親しみやす

い問いかけの形を採っている。

2007年3月8日の時間割

10.00 - 11.20 「今後を考える」(Thinking ahead) (担当: フランチェスカ・ウルフとリチャード・メイソン(Francesca Wolf and Richard Mason))

平常この時間帯は、フランチェスカとの「一般教育」(General Studies)の時間です。

11.45 - 1.00 歴史(History) (担当: キャメル・エルウェル(Carmel Elwell))

1.00 - 2.00 昼食 (在學生たちはこの時間に個人指導を受けることになります)

1.00 - 3.00 「前進を考える」(担当: リチャード・メイソン)

平常この時間帯は、フランチェスカとの「一般教育」(General Studies)の時間です。

入学前面接必須

事前面接相談を必ず行った上で、コース適性の適合する志願者が定員を満たすまで先着順というシティ・リットのアドミッション・ポリシーに沿って入学している。なお、それは、「勉強への復帰」ばかりでなく、シティ・リットにおける授業方式学習機会参加者すべてに適用される。

教育方法上の配慮

自信を付けることで学習意欲を維持し高めることに力を入れている。具体的に筆者が自分の目で確認できたこととしては、英単語テストを配布・回収採点といったやり方をとらず、個々のノートに書かせ、本人採点とすることがある。出来不出来をあからさまにしないで個人のプライドを守っている。

では、週1回で一体何ができるのか

学習スキル(study skills)を身に付けることがねらいである。なかでも、ノートの取り方を身に付けることが、最大の目的である。その基盤となるのは、「ノートを取る力を付けることで、頭の中でまとめることもできるようになる」という考え方である。そのことは、担当責任講師であって上記 2007 年 3 月 8 日時間割でも既出であるフランチェスカ・ウルフ(Francesca Wolf)氏も、筆者に力説している。

3. コースの背景・基盤となっているもの

(1) 在學生たちの特性

受講登録数 18 名であった。女性が多い。訪問当日の出席者は、女性 10 名、男性 1 名であった。海外からの移住者が多く、福祉系の非常勤職者も見られた。一般教養の講座から移ってきた人で、インド系年配者もいた。また併せて、別の学習機会にも通学している人もいる。ただ、登録しても最初から来ない者や途中から来なくなる者はいる。ドロップア

ウトは3名である(うち1名は転居)。

(2) 在学生の経済的負担

従来授業料を取ってきたが、2006-2007年度は取っていないかった。その論理は、「生きていくためのスキル(skills for life)」のための学習機会であるからということであった。「生きていくためのスキル」は、国策として成人が当時原則授業料自弁であった後期中等教育段階よりも下位水準であった。とはいえ、「勉学への復帰」は、無料だから参加できたというような人は、少なくとも出席者にはいなかったことが、参与観察当日の休み時間中に場を設けていただいた在學生への聴き取りで確認できた。文化資本や社会関係資本(social capital)を相当に有している在學生であっても、義務教育水準での自立支援であるという論理で、当時無料であったのである。

2007-2008年度(9月～翌5月)には、授業料を取っている(通常201ポンド、高齢者も201ポンド、割引対象者31ポンド)。ただし、低所得者は、学用品費や託児費用等にも充てられる奨学金(Access Fund)への申請ができる。

以上の授業料変更に関しては、シティ・リット・フレッシュ・ホライズンズ部門長(Head of Fresh Horizons)のアン・ハートリー(Anne Hartree)氏は、筆者に見学後電子メールにて2007年4月19日政府の補助金政策に関するとの下記回答いただいている。

「昨年(2006-2007年度のこと；筆者注)、「勉学への復帰」を「生きていくためのスキル」の課程として位置付けて実施しました。政府の方針に沿い、基礎的な識字・数的学力に関する学習機会と見なして、授業料を取りませんでした。本2007-8年度は、再び授業料を取るようになりました。それは、「生きていくためのスキル」と見なされなかったからです。

4. 到達度と進路

コース修了後には、「全国資格枠組み」(National Qualifications Framework, 以下イギリスの通例に従ってNQFと略称する)に位置付けられた前出ロンドン地域オープン・カレッジ・ネットワーク(Open College Network - London Region (OCNLR))が認証する水準2もしくは水準1の認定を在學生は受ける。この点に関しては、これといった到達度認証をしていないスターリング大学での試行プロジェクト群とは異なっている。

ただ、NQF水準2とは、16歳時点での標準的な到達度を示すものである。したがって、高等教育進学には、通常さらに2年間の学習が必要となる。そのため「勉学への復帰」の修了がそのまま高等教育進学へとつながっていくかは、実は別問題などところがある。たしかに高等教育進学準備課程にそのまま進む受講生は、限られているのが実情である⁷⁾。

2006-7年度在學生の進路は、次の通りであった。⁸⁾

1. シティ・リットおよび他校で勉学継続
2. 就労(子守(nanny))を継続しながら、GCSEの英語および数学の取得を目指すコースに在学

- 3 シティ・リットの演劇基礎コース(Foundation course in Drama) に在学
4. 就労(子守)を継続
5. GCSE 英語の取得を目指すコースに在学
6. クリエイティブ・スタディーズ(Creative Studies)に関する大学等入学準備コース(シティ・リット)に在学
7. 同じく、クリエイティブ・スタディーズに関する大学等入学準備コース(シティ・リット)に在学
8. 保健関係事務に新たに就職
9. GCSE 数学の取得を目指すコースに在学
10. 保健関係学科への大学等入学準備コース(他校)に在学

また、2005-6 年度在学生の進路は、次の通りであった。⁹⁾

1. 就職(宅地開発業)
2. GCSE の英語および数学の取得を目指すコースに在学後、大学等入学準備コース(シティ・リット)に在学
3. 図書館アシスタントとして在学中に職を得て、後に正規職員となる
4. GCSE 英語の取得を目指すコースに在学、そして人類学を勉強中(シティ・リット)
5. ソーシャルワーカー(非常勤)およびソーシャルワーカーとしての訓練中
6. ロンドンの建築コースに在学とともに、ロンドンのガイドとして勤務
7. 有給雇用を獲得(オフィスワーク)
8. シティ・リットの他コースに在学
9. 不明

今回訪問時「勉学への復帰」の授業では、GCSE(General Certificates of Secondary Education, 中等教育一般証書)の取得を強く奨励していた。GCSE とは、標準 16 歳で終える義務教育時に原則全員受験である学業到達度認定資格であり、NQF 水準 2 もしくは水準 1 と全く一致している。日本でいえば高校 1 年修了相当である。シティ・リットでは、英語と数学の GCSE 課程もフレッシュ・ホライズンの取り組み内として設けている¹⁰⁾。すなわち、一般若年者と同じ学力認定を受けることが求められている状況にシティ・リットも実は対応しているのである。その背景としては、水準 2 以下の職業資格を取得しても、収入として見返りが少ないことがある。そのことは、政策推進側からも実証的に提示され¹¹⁾、その内容が教育専門紙として最も有力とされる『タイムズ教育版(*Times Educational Supplement*)』2007 年 7 月 13 日号でもかなり大きく報道されている¹²⁾。たしかに「勉学への復帰」は、その前出ロンドン地域オープン・カレッジ・ネットワーク(Open College Network - London Region (OCNLR))が、NQF 水準 2 と認証している。とはいえ、「勉学への復帰」の修了証明だけでは、社会一般での通用度が十分とは実は言い難い。「勉学への復帰」担当責任講師である前出フランチェスカ・ウルフ氏も、「勉学への復帰」修了は GCSE と同水準であるものの、全国的な認知度に違いがあると筆者に説明している¹³⁾。

5. 「勉学への復帰」プログラムの政策上の位置付け

ブレア労働党政権の自立支援政策においては、トランポリンという比喻¹⁴⁾が使われてきたものの、現実はそうになっていなかった。最低限の歯止めとしてセーフティ・ネットはあったとしても、上昇もしくは再上昇のためのトランポリン、いや上昇のためのハシゴすらブレア政権の政策としては、少なくとも用意されず、足がかりとなるものがないまま「よじ登れ」といった状況であった。ニュー・ディール政策で保障する到達度を敢えて日本に当てはめれば、中学校を出て1年間専修学校で得られる水準に過ぎない。それゆえ NQF 水準2以下の到達度では、就職が非正規雇用に限定されがちとなる。短期的な職業能力開発機会で身につく技量で就けるような職種も、まさにそこに該当する。そしてそのような職の就労状況の劣悪さは、ポリリー・トインビーがその著書『ハードワーク』¹⁵⁾で告発し、世界的にも知られている。¹⁶⁾

このような矛盾は、2007年9月からの2007-2008年度より少なくとも制度設計上はなくなっている。とはいえ、実際にトランポリンのように機能する制度作りに関しては、これからのことなのである。

その一方で、2007年7月には、職業訓練の機会を労働市場の採用の受け皿に合わせて設定していくという中央政府の政策方針も打ち出されている¹⁷⁾。従来水準2以下（若年者に対しては水準3も含む）の職業訓練コースであれば、どの職種のコースであれ、学習者には金銭的負担がほとんどない状況であった。

となると、現場でも、直接かかわる政策理念の変更による影響が見られることとなろう。では、シティ・リット「勉学への復帰」は、今後どうなるのだろうか。シティ・リットでは、公益法人として本来なすべき使命を果たそうとして、他コースから得られた収益を回すことをしてきた¹⁸⁾。「勉学への復帰」プログラムにもその方針のもと運営資金が回っているものの、学習者にも一定程度の自己負担を求めることになった。それは、「勉学への復帰」プログラムでは、高齢者が一般在学生と全く同額の授業料であることにも表れている。高齢であるだけでは、授業料を下げる理由とならないとの判断がそこにある。

なお、他教育機関における関連する取り組みの検討は、今後の課題となる。その際、多くの場合財政的基盤がシティ・リットよりも弱いと言えるので、その点に十分留意することが必要となろう。

6. おわりに

最後に、日本への示唆に向けた今後の課題について述べたい。すでに日本においても、いわゆる草の根の学習支援活動ばかりでなく、地域によっては夜間中学といった公立の取り組みがある（東京都で中学校夜間学級が7校に設置等）。また定時制高校等でも、補償教育が事実上行われている。それらの日本国内の実績と今回紹介・検討したイギリスの事例とを十分比較考察することで、実践的に有効な知見としていくことが当然重要となる。

一方、今回紹介したイギリスにあって日本に存在しないものとして、学力水準を段階的に認定する公的制度の整備がある。すなわち「高等学校卒業程度認定試験」よりも下の水

準での普通学力認証を公的に位置付けた制度が、イギリスではすでに設定されているのである。このような制度的基盤整備が日本では導入可能性なのか、また可能とすればどのように導入していくのが良いのかが重要な検討課題となろう。

[注記]

- 1) その起源は1966年にまで遡れる(Peter Jarvis, *Adult and Continuing Education: Theory and Practice*, 2nd ed. (London: Routledge, 1995), 244)。
- 2) Jarvis, *Adult and Continuing Education*.
- 3) 柳田雅明「イギリスにおける成人のための高等教育入学準備課程」『日本生涯教育学会年報』22 (2001): 193-204 および 柳田雅明『イギリスにおける「資格制度」の研究』(東京: 多賀出版, 2004), 191-200。
- 4) 柳田「イギリスにおける成人のための高等教育入学準備課程」, 195-196。
- 5) 柳田雅明「イギリスにおける成人向け大学等進学準備課程の再検討: 自立支援政策との関連を焦点に」『日本生涯教育学会論集』28 (2007): 149-157; および 柳田雅明「研究課題・学習成果認証において社会的包摂をいかに実現するのか: 3. スコットランドに見る制度設計の現状と課題」『生涯学習研究 e 事典』(日本生涯教育学会, 平成 18(2006)年 11 月 2 日登録), <http://ejiten.javea.or.jp/content.php?c=TmpReU5qTXo%3D> (2008 年 7 月 8 日参照)。
- 6) City Lit, *Access: Return to Study* (London: City Lit, [2007]), <http://www.citylit.ac.uk/coursedetail.php?course=Access%3A+Return+to+study> (accessed November 9, 2007)。
- 7) 担当責任講師で上記 2007 年 3 月 8 日日程表に既出でもあるフランチェスカ・ウルフ (Francesca Wolf) 氏より 2007 年 11 月 20 日に電送いただいた非公開の内部集計資料である。
- 8) Ibid.
- 9) Ibid.
- 10) なお、シティ・リットでは GCSE コースの科目としてイタリア語とスペイン語を設けているものの、これらはフレッシュ・ホライズンの枠組み外である。
- 11) Andy Dickerson, with Anna Vignoles, *The Distribution and Returns to Qualifications in the Sector Skills Councils*, Research Report 21 (Wath-upon-Deane: Sector Skills Development Agency, April 2007), 14-15.
- 12) Ian Nash, "Apprenticeships 'a Waste of Time'," *Times Educational Supplement*, 13 July 2007.
- 13) 前出フランチェスカ・ウルフ氏より 2007 年 11 月 20 日から筆者に宛てた電子メールの文面に記載されていた。
- 14) Stephen Driver and Luke Martell, *New Labour: Politics after Thatcherism* (Cambridge: Polity Press, 1998), 107; and 今井貴子「ブレア第一次政権下の職業教育・訓練政策: 「包摂」社会政策とは」『日英教育研究フォーラム』8 (日英教育学会, 2004): 22. 2005 年にも、当時のデイヴィッド・ブランケット (David Blunkett) 労働・年金大臣が、「セーフティ・ネットからエスカレーターもしくはトランポリンへ (from a safety net to a trampoline or an escalator)」 (Department for Work and Pensions, "12 May 2005 - Blunkett calls for

- partnership in finding long-term solution for pensions challenge," <http://www.dwp.gov.uk/mediacentre/pressreleases/2005/may/pens1.asp> (accessed July 8, 2008))との表現をしている。
- 15) Polly Toynbee, *Hard Work: Life in Low-pay Britain* (London: Bloomsbury Publishing, 2003) [邦訳 ポリー・トインビー『ハードワーク: 低賃金で働くということ』, 椋田直子訳 (東京: 東洋経済新報社, 2005)].
- 16) 2007年8月までの状況については、次の拙論で整理・検討してある。柳田「イギリスにおける成人向け大学等進学準備課程の再検討」および 柳田雅明「イギリスにおける成人学習公共管理システムの転換: イングランドでの公費支出政策とその現場対応を中心に」『成人学習施策に見る公共管理システムに関する調査研究書 研究成果報告書』(大桃敏行 研究代表者) (東北大学大学院教育学研究科, 2007), 89-99.
- 17) Department for Innovation, Universities and Skills, *World Class Skills: Implementing the Leitch Review of Skills in England* (London: Stationery Office, 2007).
- 18) 2005年9月13日筆者シティ・リット訪問時に、ニック・ムーア副校長(Nick More, Vice President)より取材聴取した。

[参考文献]

- Brown, Gordon. "The Politics of Potential: A New Agenda for Labour." In *Reinventing the Left*, edited by David Miliband, 113-122. Cambridge [England]: Polity Press, 1994.
- [City Lit]. *Enrolment Form and Learning Agreement*. London: City Lit, [2006].
- [City Lit]. *LOCN Programme Submission Document: City Lit Return to Study Programme*. London: City Lit, [2006].
- Department for Innovation, Universities and Skills. *World Class Skills: Implementing the Leitch Review of Skills in England*. London: Stationery Office, 2007.
- Dickerson, Andy with Anna Vignoles. *The Distribution and Returns to Qualifications in the Sector Skills Councils*, Research Report 21. Wath-upon-Dearne: Sector Skills Development Agency, April 2007.
- Driver, Stephen and Luke Martell. *New Labour: Politics after Thatcherism*. Cambridge [England]: Polity Press, 1998.
- Field, John. *Social Capital and Lifelong Learning*. Bristol: Policy Press, 2005.
- 藤原孝章・奥本香「イギリスの成人教育 ESOL コースにおける Skill for Life カリキュラム」『現代社会フォーラム』3 (同志社女子大学社会システム学会, 2007): 1-10.
- 今井貴子「ブレア第一次政権下の職業教育・訓練政策: 「包摂」社会政策とは」『日英教育研究フォーラム』8 (日英教育学会, 2004): 15-38.
- Organisation for Economic Co-operation and Development. *Qualifications Systems: Bridges to Lifelong Learning*. Paris: Organisation for Economic Co-operation and Development, 2007.
- Preston, John. "Enrolling Alone? Lifelong Learning and Social Capital in England." *International Journal of Lifelong Education*. 22 no. 3 (2003): 235-248.
- 白幡真紀「イギリスの成人教育領域における公共管理システム: スキル水準向上政策と学習提供機関の分析から」『国際教育』12 (日本国際教育学会, 2006): 65-84.

白幡真紀「ニューレイバーの職業教育・訓練政策による技能能力向上の展望: Skills Strategy White Paper の提起を中心として」『国際教育』11 (日本国際教育学会, 2005): 23-42.

Toynbee, Polly. *Hard Work: Life in Low-pay Britain*. London: Bloomsbury Publishing, 2003.

山田寛之「イギリス成人教育研究の現代的課題」『中央大学大学院研究年報・文学研究科篇』32 (2002): 91-100.

柳田雅明「イギリスにおける成人向け大学等進学準備課程の再検討: 自立支援政策との関連を焦点に」『日本生涯教育学会論集』28 (2007): 149-157.

柳田雅明「イギリスにおける成人学習公共管理システムの転換: イングランドでの公費支出政策とその現場対応を中心に」『成人学習施策に見る公共管理システムに関する調査研究書 研究成果報告書』(大桃敏行 研究代表者), 89-99. (東北大学大学院教育学研究科, 2007).

柳田雅明『イギリスにおける「資格制度」の研究』(東京: 多賀出版, 2004),

柳田雅明「イギリスにおける成人のための高等教育入学準備課程」『日本生涯教育学会年報』22 (2001): 193-204.

<付記> 本論考は、平成17年度-19年度科研費基盤研究(C)「学習成果の厳正な評価判定は、筆記式一斉試験以外で果たして可能なのか」(課題番号 17530590)を受けたものである。